

マイトーク MY TALK

発行：中央大学放送研究会OB会（会長／砂岡茂明）

住所：〒192-0351 東京都八王子市東中野742-1 中央大学放送研究会気付

発行日：平成21年3月

第11号

「放研アカデミア部会…1年目の活動」

（11期・アカデミア部会副幹事長 有松幹夫）



水上元会長が生前、「半世紀余りの歴史と多くの人材を社会に送り出してきた放送研究会の歴史の積み重ねは文化系では貴重な存在であるけれど、歴史が長いゆえ世代間の交流が途絶えがちで、この歴史を持続し現役・OBの交流が出来ないだろうか」ということを良く話されておられ、OB会活動の課題でもありました。

「アカデミア部会」と名付けられた活動の一つとして前OB会長、藤原さんを中心としたOB有志で、マスコミ界志望はもとより一般企業への就職を希望する現役会員を対象に、就職活動支援として、難読漢字や地名の読解力、時事の話題等に関するセミナーを多摩キャンパスではほぼ毎月開催してきました。大変好評で今後も継続して実施することになっています。

また、昨年度から、就職活動開始時期に合わせて、OB有志の社会経験を活かして就職試験の模擬面接を実施しています。一昨年までは一般企業への就職は学生の売り手市場に近く、模擬面接にもあまり熱心ではありませんでした。昨今の景気を反映して大変厳しい就職活動になってきましたので、参加する現役も多く、真剣に取り組んでいます。何とか希望の企業に合格させたい思いでOB有志の模

擬面接官の取り組みにも力が入ります。

「アカデミア部会」のもうひとつの活動にOB会員の社会での豊富な知識と経験をリユース（再活用）しOB会の活性化と現役会員への支援、会員同士のコミュニケーションを目的とした、「講演会」の開催があります。

各期幹事による幹事会を四半期に一度開催し、その折に講演を実施するものです。

スタート第一回の講演は、平成二十年六月に深夜放送のパーソナリティの草分け、斉藤安弘さん（十二期）に深夜放送創生期の苦労話やその内幕を、二回目は平成二十年九月に個人情報保護についてNNTで、情報通信業務に携わっていた砂岡茂明さん（十二期・現OB会会長）、三回目は平成二十年十二月に、鉄鋼橋梁業界で現在もその重責を担い活躍中の大高善靖さん（十一期・片山ストラテック）から、公共事業受注の苦労や現在の日本の橋梁を中心とした公共インフラの危険性と課題などのお話をお聞きしました。（三氏の講演の要旨は五〜六ページを参照。）この講演会には現役も多数参加しています。

現役・OB間、特に世代の離れたOB同士の交流も少しづつ広がって来ています。孫のような現役学生から貰う元気と引き換えに我々の知識や経験を活用してくれること、OBの間でも世代間での仕事や生活、趣味などの情報交換の場として育てていければと考えています。

自身の体験や蓄積した知識を是非皆さんにお話ししたい方、世代を越えたOB間の交流を望まれる方、交流の場として「放研アカデミア部会」を活用していただければ幸いです。

卒業後五十年、ホームカミング デーに行って来ました

佐久間良平（六期）

神田、駿河台の大学の講堂で卒業式をあげたのは、一九五八年（昭和三十三年）の三月であった。

今年で我々六期は卒業以来、半世紀の五十年の歳月が経過した。今年七月に、「卒業後五十年学員対象特別企画・第十九回ホーム・カミングデー」の案内を戴いた。平成二十年十月二十五日、川越市在住の従姉妹の案内で、大正浪漫通りを歩き「川越まつり会館」前に到着した。ここで七期佐藤・同期石河さんと三時半に落ち合うことにした。三時四十分、バスで兩名が到着し、地元の佐藤君の案内で「川越まつり会館」に入場し、小江戸・川越の山車などをゆつくりと見物した。六期大沢・林の両君が「四校バスツアー」を終えて川越駅に着き、料亭に六時過ぎに到着し五名が揃った。

翌十月二十六日、九時前に佐藤君が愛車でホテルに到着し、大沢・林・石河・佐久間の四名を乗せて、一路多摩キャンパスに向けて発進した。

本部棟の前で、黒色のハイヤーが我々の横を通った。チャリと蓮池薫氏らしい人物が乗っていた。停車して降りた人は蓮池薫氏だった。ガイドブックには対談『母校の思いを語る』が十二時二十分からと載っていた。

我々五人は、ぶらぶらと売り場を眺め、大学関連グッズの買い物をした。抽選券を貰い、箱から三角くじを一枚取ると、何と当選！結構重い福袋を戴いた。石河さんも大当たりで、新幹線で来た人だけ

が当たってしまった。

昼食は1Fのレストランコップ。食券自販機で「良さそうなの」のは売れ切り、そこで五人とも二七〇円のラーメンにした。値段は超格安、味はまずまずだった。何でも旨い性質たちですので。



広場に「教室貸出状況一覧」の看板が立て掛けてあり「五階五〇五中央大学放送研究会OB会」と中段下に記してあった。

林が、この教室に同期の石原・土屋・長谷川君が一時十分に来ると言った。五〇五教室には現役の小田島香現委員長以下数名が来ており、なるほど「CHK現役・OB交流教室」と言う訳である。何と十二期砂岡OB会会長も来ており、パソコンを操作していた。『現役の作品を出しましょうか、ゴク短いやつを』とPCを操作し、「朗読」の作品を拜見した。イラスト、タイトルも

シャレしており、narratorは小田島香現委員長で落ち着いた語りの小品でした。つづいて今春三月の我々有志の「立崎さん追悼・紀行」P3参照の写真をPCで眺めた。前OB会長で、八期の藤原君がニコニコとやって来た。一時前に、石原君が入って来た。卒業以来五十年振りの再会であり、時の流れを感じさせた。程無く長谷川・土屋君が到着した。両君とも何十年振りであった。これで六期は七名揃ったの

である。十一期有松君・十二期河口君・十三期柳田さんがやって来た。現役から見れば、七十代の我々の姿は「自分達の両親より年配であり、途方もなく老人に見えるかも知れない」などと推測した。事実、若者たちは緊張気味の様に感じられた。我々から見れば、息子・娘か孫の年齢であり、青春時代と真ん中世代と五十年経過の歳月の長さを痛感した。『部屋を案内します・』とのことで、四号館・サークル棟へ降りた。かつての駿河台の部屋よりは、いくらか広い感じだった。現役が何人もきており部屋はほぼ満員になった。二十五周年記念の「寄せ書き」があったのには驚いた。大変な記念品であり、よくぞ保管してあったものと感心した。階段を降りて録音室に入った。高度な機器がありマイクが置かれてあり、正に放送室であった。

我々にとっては、神田・駿河台校舎が母校であり思い出のつまった場所であった。現在はその懐かしい建物は何一つ残っていない。確かに、多摩キャンパスは大学として素晴らしく立派に構築されているけれど、異郷の観もした。しかし、サークル活動の会が営々として活動していることに、年を経ても連帯感がとぎれること無く感じられた。

過ぎ去った、若き日の記憶（夏のキャンプ・発表会・新潟調査旅行と佐渡一泊・大学祭・CM応募・コマソン応募・新人生歓迎会での「クラッシュック音楽会」TBSラジオ公開録音中止事件」と応援団解散など）を共有している仲間と、今回参加出来た幸せを感じている。

最後になりましたが、現役の皆さんには折角の休日にお集まりいただき、お世話になりお礼を申し上げます。



同期会レポート

立崎さん追悼・紀行

佐久間良平 (六期)

畏友立崎則定さんが急逝されてから早くも五年の歳月が過ぎ去った。

昨年(五期)の八月、「立ちゃんのお墓まいりをしたい」と言い出したのは、立ちゃんと同期の佐藤君かも知れない。これに林君が賛同し幹事役をつとめ、故人ゆかりの九名が十和田市を訪問することとなった。

そして、奇しくも五年前と同じ日の今年三月十六日、墓前に詣で焼香することが出来た。

◎平成二十年三月十八日(日) 薄曇

東京駅八時五十六分発・はやて九号は瀬川(五期)・林(六期)・佐藤・杉山・皆川(七期)・藤原(八期)・砂岡(十二期)の七名を乗せて北上し、仙台で黒沢・佐久間(六期)



が合流した。黒沢氏は、買ったばかりの新品のニコンのデジカメを持参し、早速稼働させた。

八戸でスーパー白鳥に乗り継ぎ三沢へ。三沢から十和田観光鉄道にゆられること三十分、午後一時過ぎに十和田駅に到着した。

十和田駅前には十鉄のマイクロバスが待っていた。昼食は一寸亭の焼き肉定食の予定が、混んでいるので斜め前の蕎麦屋に入ったが、ざるの盛りもよくテンプラも良く、おまけに値段が手頃で大いに満了した。

二時半前に、壮大かつどしりとした立崎邸に到着した。

奥さんの出迎えを受け、挨拶をそこそこにして仏壇に焼香し合掌した。

入院してから、あまりにも早すぎた逝去について、奥さんより『人工透析をしている時に亡くなりました・・・』と初めて聞かされた。

奥さんから銘菓を頂戴し、マイクロバスに乗り、部落の外れにある墓地に向かった。立崎家の墓地は中央に位置しており、立崎家の地位を物語っていた。墓前に花を供え、焼香し手を合わせた。少し風があり、佐藤君は線香に火が付かず苦勞した。

三時過ぎに、墓地の前で奥さんにいとまごいをし、バスに乗り込み蕨温泉に向かって発車した。

奥入瀬の入り口からは残雪が多くなっていた。坂を上るにしたがって積雪が増しブナ林が続いていた。ブナ林と言えば、平成十年五月十日〜十二日、立ちゃんの案内で白神山地のブナ林を散策したことが脳裏に浮かんで来た。

四時過ぎに、蕨温泉に着いた。ここは昭和六十年六月十四日に、立ちゃん幹事でOB十四名が世

話になったところで、実に二十二年振りの「思いの宿」であった。

どしりとした木造の建物の、二階の「二百番室」から「二百三番室」の三部屋に落ち着いた。本当に久しぶりに参加した方や、昨年三月に「あこう鍋を食べる会」に参加した方、八月のOB会今年二月駿河台で会食した方などの再会で、ひしきり挨拶が交差した。

メモリアルの旅の夕食は一階の和室で六時かである。OB会長を勤めた藤原・砂岡両君に敬意を表して上座に着席してもらい、後はバランスよく席した。

司会の佐藤君が、乾杯の音頭を一番遠路から加した杉山さんを指名した。

すると杉山さんは『カンパイ』と簡単・明瞭一声。同期の立ちゃんへの追悼の宴のための「ひこえ」でした。乾杯の直後に、仲居さんが入ったので記念写真のシャッターを押して貰った。

砂岡君が持参した、総会のDVDがテレビに示出された。水上会長・立崎さんの元気な姿が現れた。

学生時代の話題・エピソードで大いに盛り上がった。

翌十七日(月)は八甲田山、ねぶたの里、三丸山遺跡などを見学し青森駅で仙台組と東京組に別れ散会となった。

(平成二十年三月記)

十三期生 横浜に集う

渡邊萬壽男（十三期）

我が放研十三期生の記念すべき第十三回同期会は去る平成二十年九月三十日〜十月一日に横浜において開催された。

昨年 京都での集いの折 来年は横浜でやろうと手をあげてくれた佐藤君が一年かけて調べに調べに練った計画をもって「ハマ」へ集合をかけてくれた。

東は北海道から乗安君、西は宝塚から因田君、中部岐阜から私、渡邊が、あとは関東在住の越、星、川鍋、佐藤の諸君と前田（山本）、蛭田（川上）、柳田（吉田）の諸嬢で総勢十名が馳せ参じた。直前まで参加予定だった水上（小須田）さんは急用のため不参加。

そしてここに当然居たであろうはずの浪久（館村）さんは今年二月急逝してしまったのだ。私の館村像は落ち着いた大人の女性の雰囲気があった人という印象をもっていたが昨年久々に再会しそんな話をして二人で笑ったことを思い出した。

さて九月三十日 桜木町から始まって「ハマ」の看板 赤レンガ倉庫、山下公園、港の見える丘公園、外人墓地、元町公園、元町商店街ではキーキ屋でティータイム。

さすがに調査員の佐藤君とハマツ子の蛭田（川上）さんは先頭に立ってガイドをしてくれ「昔わたくしが住んでいた家」まで案内してくれた。

四十五年前 私が二人で歩いた港の見える丘公



蛭田さんが41年前結婚式を挙げた水川丸をバックにして

園や外人墓地はその面影もなく当時を思い出すキッカケさえつかめなかった。（年のせいで忘却したのかその程度の思いだったのか）夜のメインイベント 中華街「萬珍楼」での晩さん会では盃を交わしながらそれぞれの近況報告を述べ最高の中華料理に舌づつみを打った。

酒がすすむにつれて話題はメタボや年金、果てはリーマンブラザースの破たん、端を発した世界的な金融恐慌の恐れなど円卓の料理を回すのも忘れて慰めたり納得したりしてあつという間のひと時を過ぎた。

おながが太くなったところで街に繰り出すことにした。小雨に煙るみなどみらいのランドマークタワーなどビル群を見るのもまた一興かなと。

虹色に輝く観覧車、スイカを縦割りにしたようなホテル、帆をたたんで静かに眠る練習帆船日本丸。昔使っていた港への貨物船の線路だけが残った「汽車道」など新旧混在するいまの横浜を雨中散歩した。

ホテルへ戻って今度はハマの夜景をバックにラウンジで二次会。話は放研時代のなつかしき思い出ばかり。よわい六十六歳ともなると先の話より前の話が光る。そういえば自分の親爺からもよく昔の話をくどくどと聞かされたなあ。

翌朝タクシー組と自家用車組に分かれて三溪園に向かう。園の入り口で先についたタクシー組が自

家用車組を待つこと三十分。しびれを切らせた幹事の佐藤君がケイタイを入れるともう着くでしょうと。あちらもカーナビを入れたからと。でも一向に到着せず、待ちくたびれた男性陣はどうせ同乗しているのは十三期かしまし娘たちだからその「クチナビ」に翻弄されているのかなと運転役の越君に同情しきり。

そんなところへ連中到着。着くなり越君が自称ハマ通の蛭田さんと前田さんの口ナビが右だ、左だと指示してくれるのでこんがらかって疲れたよと。

さすがに放研レディスは情景描写がお手のもの。それがかえって運転を混乱させたか。

少し遅れたものの庭園見学へ。内部は小さな兼六園といったところか、ただ名のある名園と違うのは豪商の原家が全国各地から建物的価値のありそうな旧家や寺社仏閣を園内に移築させ庭とのバランスを考えたようである。しかしちよつとがっかりしたのはお手入れがあまり行き届いてないようでせつかくのお庭が以前訪ねた時のイメージとのギャップで少々がっかり。

しかし園内は昔の恋人たちが胸に旅行団体章をつけて散策していた。

そしていよいよ最終章、三溪園を出て本牧界隈の寿司屋で昼食。そのころには完全に雨も上がりさわやかな秋風が頬に心地よかった。

昨日からみんなかなり歩いたにもかかわらずまったく疲れも見せず二日間のことを子供のようにはしゃいで語りスケジュールのこともお金のことも完璧にこなしてくれた幹事の佐藤君に感謝した。

そして次回来年は群馬県水上温泉での再会を約束して散会となった。

OBによるOBと現役のための 何でも講演会が始まりました。

各期の幹事を通して皆様にご連絡致しますので皆様お誘い合わせの上、駿河台記念館へお出かけ下さい。地方のOB諸氏には「マイトーク」にてその模様を報告したいと思います。人生経験豊かなOB諸氏のお話は何が飛びだしますか。

「深夜放送あれこれ」(二十年六月)



講師：斎藤安弘氏(十二期)

小田島 香 記(五八期)

(五八期・二十年度委員長)

「OBパワーに負けないように！」私は、いつもそう思っています。OB会幹事会に出席しています。大学二年生の冬、副委員長という役職に就いてから、そう感じる機会が増えました。委員長・副委員長は、三ヶ月に一回のペースで開かれるOB会幹事会に出席することがその仕事の一つです。

私は、その場で自分たちの活動の様子を報告したり、逆に幹事会で決まったことを現役の皆さんに知らせたり、端的に言えば、OB会と現役のパイプ役といった仕事をしています。

しかし、いつも思うのは、「とにかくOBの皆さんが若い」ということです。OBの方々には私の両親より年上の、ともすれば祖父の年齢に近く、若い方もいらつしやいます。年齢的には私の方が若いはずなのに、いつもOBの方々の勢いや迫力に圧倒されている、そんな気がしてならないのです。あの若々しさはどこから来るのだ：自分の中にある疑問を抱え、私は六月十四日の放送研究会OB会幹事会

へ向かいました。

その日は、斎藤安弘さんをお招きしての第一回目講演会もあり、内容はいつも以上に盛りだくさんで、私自身、初めて斎藤さんにお会いするというところもあって緊張しながら幹事会に出席しました。

斎藤さんのお話を聞いて、さすがにプロの話は一味違う、と実感しました。聞き手を全く飽きさせることなく、スラスラと言葉が出てくる。プロに比べては、当たり前なかもしれないですが、私にとって驚きの一時間でした。コミュニケーションで、パーソナリティがいのことをしていた私にとって、自分の話で聞き手を飽きさせないことの難しさには身に覚えがありました。斎藤さんのお話は、内容、話術ともに学ぶことばかりでした。

講演が終わったから、斎藤さんから「もっと現役は元気があった方がいいよ。」との激励もいただき、「まったくその通りです。いつも気圧されています。」と、私の中で呟いていました。最終的には、いつものようにOBの皆さんに圧倒された訳ですが、この講演を聞いてあることを感じました。OBの皆さんの若さの秘訣は、積極的に何か行動し、また、放送研究会が好きであるということです。ということは、現役生も負けてはいただけません。これからは、私の可愛い後輩たちが、OBの皆さんに負けず劣らず、元気にOB会幹事会をお手伝いしてくれることと思います。私自身も、パワー漲るハウケンOBになるために、残り一年、元気いっぱい就職活動に取り組みたいと思います。いつも応援してくださるOBの皆さん、本当にありがとうございます。最後に、個人的な話ですが、斎藤安弘さんにはお忙しい中、OB訪問という形でもお世話になりました。

した。たくさんアドバイスをいただき本当に励みになりました。就職先が決まり次第、またご連絡させていただきます。ありがとうございます。

それでは、またOB会に出席させていただきます。お世話になりっぱなしではあります。今後ともどうぞよろしく願います。

「個人情報保護の動向」(二十年九月)



講師：砂岡茂明氏(十二期)

浅見一策 記(十四期)

IT・ケイタイ等、通信の発展は人々が生活する上であらゆる情報を即座に手にする事が出来る便利の上ない世界を現出しましたが、その反面、個人生活や企業活動を根本から脅かす様な事態をも発生させると言う現象を呈してきました。

二十年九月、「個人情報保護対策」について永年NTTで情報システムに携わってこられたOB会長砂岡茂明氏(十二期)の講座を聞きました。

「個人情報保護の動き」「個人情報保護対策」について、最近の動向、法案の整備状況、自分の個人情報保護するための方策等具体的に説明がありました。この講座を聞いて感じた事は人が作り出しそして使う、姿、形の見えない情報と言うモニターを前にして、まずはITに振り回されない様、更なる鈍感力に磨きをかけて生き抜く事が一番かなと思えました。

最後に、個人情報が漏れて振り込め詐欺に利用されたりした場合の解決方法として、「決して自分で判断してはならない。」「家族、友人、先輩な

どに相談すること。」「そのためには日頃から、OB会等を活用して相談できるネットワークを作っておくと良い。」と現会長らしくOB会の効用をアピールしていました。

「公共事業の現状と今後 （橋梁問題について）」（二十年二月）



講師・大高善靖氏（十一期）
荒井藤樹 記（十四期）

鉄鋼メーカーと橋梁鉄骨建築業界を巻き込んだ談合疑惑に検査が動き出したのは平成十六年六月。当初は関東の大手が対象とおもっていたが最終的に当社を含め四十八社中二十四社が摘発され指名停止処分となる。橋梁と建築鉄骨を製造する企業で四五年間過ごしてきた。本州四国連絡橋の建設など国のビッグプロジェクトにも参加する公共事業との係わり深い業態の経営者として当時、「指名停止処分」は当然重くのしかかった。

グループ社員、家族三千名の生活を如何にして確保するか。この難局に対峙するため全身全霊をかけ東奔西走して体験談を独特な馬場節で、時にはユーモアもまぜ駿河台記念館で約一時間、現役生も含め、我々OB三十余名を前に熱っぽく話された。限られた紙面の都合上内容が断片的になったことをお許し戴き紹介したい。

「住みにくくなった日本の再生に向けて」
「慢性的な高失業率」増加する「倒産、犯罪、自殺者」。嘗て世界一安全に暮らせる国から程遠いままの日本。昨年末の米国のサブプライムローンに端

を発した金融不安が国家の信用不安まで引き起こす国際的に百年に一度の大混乱に陥っている。グローバルズムが急速に進む中、米国型経済が崩れた今こそ、事態を打開するには「勤勉性、技術力」をフルに使い「ものづくり」と「汗をかく」ことを基本に付加価値を生み出す日本の経営モデルが力を発揮してくるとおもうし、させなければならぬ。

台風や地震、洪水といった自然災害が多い日本や世界一と誇れる。日本古来の「和をもって尊しとなすべし、乏しきを分かち合う」の心を以て適正利潤と適正価格を得られる中長期の視野を持ち合わせた仕組みと構造を作り上げ国民的な合意していく真剣な努力と知恵が必要。拝金主義や経済効率偏重主義蔓延による精神のゆがみが米国の二の舞を踏むのではと憂慮する声も少なくは無い。

「社長業は九十五パーセントが苦しみ……」
「社長業というのは九十五パーセントは苦しみ、そして五パーセントの楽しみ」と聞かれれば答える。熾烈な仕事上の競争との対峙、社員、株主、社会への配慮等に心休まる時間は限られる。「談合問題」の前後から胃腸薬と精神安定剤は常に持ち歩いてる。学生時代の思い出、勉強はあまりしなかった。放研の活動よりマジジャンに明け暮れた思い出のほうが強いが今日のように当時の同期や仲間に出たりOB会のゴルフコンペに参加できる時は変えがたい至福の時間でもある。もし又、チャンスがあれば四十五年の公共事業への仕事を通し「得たこと伝えたいこと」をきっちり準備して紹介をさせていただきます。

【似顔絵作成は志村弘昭（十二期）さんです】

浪久芳美（館村）さんを偲ぶ

水上 眞子（十三期）

「少し熱があるのよ。」と言いながら、その夜ウインフィルを聴きに行くと言っていたタテサが、四日後に電話した時には、意識混濁で入院していたときの驚き……

さらにその四日後には、髄膜炎で、回復の見みは限りなくゼロに近いと聞き、動揺して駆けつた病院の集中治療室で、彼女はただ静かに呼吸しているだけだった。

それから、ほぼ一カ月後の二月八日、タテサは帰らぬ人となってしまった。中大放研に入会し初めて顔を合わせてから、四十七年の月日が流れていた。

アナウンス部で、先輩から指導を受けたこと夏の合宿に参加した時の、無邪気な大騒ぎ、一緒にアルバイトをした金で、山歩きの装を用意して、そのいくつかの旅行をたことなど、いつ隣にはタテさんがいた。卒業後も、東のフジテレビに入社したタテさんと、古屋の東海ラジオ

私は、途中の静岡会ったり、帰京し



浪久さん作

「やまぶどう」

折ごとに会い、結婚してからも、それぞれ子持ちになつてからも、絶えることなく会つていた。嬉しい時、悲しい時、受話器の向こうにはタテさんがいた。十年前、夫を亡くした私に、彼女はいつもさりげない気遣いをしてくれた。

二月十三日、芝の増上寺の告別式に、私は弔辞を読んだ。数百人の人々の前で、緊張に震えながら読んだ私だったが、彼女への思いを、推敲を重ねた文章にまとめられたのは幸せだと、今にして思う。

タテさんは、生き方が毅然としていた。自分の居場所の中で、常に、殆どのことを完璧にこなしていた。それでいて、決して驕らず、目立つことを好まず、どちらかと言えば、のんびり、ゆったりとした生活スタイルを楽しんでいた。

価値観は、筋が通っていて「ぶれる」ことなく、時に鋭い観察眼で物事を評価しながらも、それを声高に言うことはなかった。

長年続けていた茶道は、「静かで簡潔」を好むタテさんにとって、心底好きな趣味の一つだった。この秋には、お茶の先生が、京都の表千家でお茶席を持たれるというので、昨年の同期会の帰りには、一人下見をしてくる気の入れようだった。彼女の居ない茶会を、彼女はどんな思いで天から見ただろうかと思う。

棺の中のタテさんは、薄い海老茶色の和服を纏っていたが、それは今年の「初釜」のために本人が誂えたものだったと、後で聞いた。

電話の時、「浪久です。」と言った、低めの、きれいな声は、二度と聞けなくなつてしまつたが、私の耳には、いつまでも残っている。

(二〇〇八年十一月十日)

十四期 藤林 稔君を偲んで

『君はもういないけど』

荒井藤樹(十四期)

平成二十年三月二十日、彼岸の中日 彼は六十四歳十一月で帰らぬ人となった。ご子息から訃報を知らされた時、一瞬わが耳を疑い二の句を失った。中央宣興(株) 在職時の十年ほど前に、大動脈瘤で二度目の入院加療中、人工血管移植の大手術を行った。家族の了解のもと二三人の同期仲間と見舞いに伺った時、彼はベッドの上でゆっくりパジャマをぬぎ術後の上半身を見せてくれた。左胸部から縦に四十七センチ位一直線の縫合あとが生々しく残りまさに満身創痍の感。

一瞬、目のやりばを失ったことを覚えてる 傷跡に残る痛みをかばいながらも笑顔で「ヤマは越したので」と安堵の様子も窺えた。通常、予後五年以内に再発すると九十%死亡するといわれ、民間療法、内科治療はほとんどないとされている。爾来、再発のリスクを抱えながら節制と安静の生活の日々となつた。現役リタイア後は得意な技術と、持ち合わせたノウハウを駆使しパソコン教室のインストラクターとして十年余り、懸命に頑張つた。今、思うと本人はじめ御家族の方々の日々はいかばかりであったかと想像すると胸が痛むおもいである。

ご家族から奥様の気持ちとして「葬儀はごく限られた内輪のみで行いたい」との申し出もあり同期三人で越谷の斎場での密葬に参列。生前彼がこよなく好んだポールモーリアの曲が静かに流れる中、焼

香の列に加わる。遺影の写真は前年七月長女ひとさんの結婚式のスナップから花嫁の父のモーニング姿。嬉しさの中にチョッピリ照れくさそうな笑顔の中の優しいまなざしが会葬者一人一人に「ありがとう」と投げかけているようだった。

彼との出会いは、付属の中大杉並高校入学時新人の放送部員として先輩から紹介され、顔をあはせたのがきっかけとなる。当初四人いた同期は苦学を共に青春時代の一ページを飾り卒業時には「会長」、「荒ちゃん」の二人となり、難関の学内選抜クリアーし期せずして白門のCHK入部となる。んだ学部、技術部、アナ部と活動のステージは異なり二人のつきあひも高校時代とはおのずと限られが常に身近な存在として部室でたまに言えば「荒ちゃん」「会長」と呼応しながらそののち半世紀にわたる友人となつていく。「会長」の由来は当時、発した産業界の労使紛争の調停機関「中央労働委員会」(中労委)の幹旋役で名をはせた藤林会長を、じつて私が高校時代に呼ぶようになったのが始まりである。

卒業後、社会人となり、会う機会は限られたがたまにどちらからとも無く電話でのやりとり、今テレトモとしての付き合いが続いた。彼は仕事柄当時いち早く携帯電話やメールをコミュニケーションのツールとしたのは同期の中でもはやかったのになかつただろうか。

まじめで、まめ、凝り性、声を荒げたことは、ず無い。もっぱら聞き役の彼も、アルコールが進みとさりげなく下ネタの話や新しいゴシップ、情報披露してくれる一面も持ち合わせていた。同期のPにも積極的に投稿するひとりだったとおもう。

HPのメールで印象深く残る内容に、一昨年の夏の甲子園で彼と同郷、奥様の母校県立佐賀北高校が激戦を制し全国制覇した時、家族で歓喜しその夜、彼は久しぶりに安眠できた旨の報告。又、同期の津曲婦人が六十歳からはじめた油絵の展覧会に誘われその作品を鑑賞しながら仲間との楽しいひと時を過ごせて気持が癒されたとの体験記などが今ものこっている。CHK創立五十五周年記念事業の夜、お台場で全国から集まった同期会での記念写真。年末、小岩のチャンコ料理屋での忘年会が彼と我々の最後の出会いと別れになってしまった。

“冬来たりなば春とうからじ”梅のつぼみも大きくなり花をつけはじめた。彼がとても楽しみにしていた初孫も、昨年七月無事誕生し和哉君と命名された。生後六ヶ月になりかわいいうさや笑みに奥様も力をもらい一時、淋しさも癒され仏壇の彼の写真に「稔さん。ごめんさい、私ばかりが和哉を一人占めにしてしまつて、又大きくなつたみたいよ」

機関誌「マイトーク」がお手元に届く頃には一年が過ぎ去る。あらためてご冥福をおいのりしたい。

合掌

訃報

次の方々が永眠されました

田振 昇氏（五期） 平成二十年四月
浪久 芳美氏（十三期） 平成二十年二月
藤林 稔氏（十四期） 平成二十年三月
慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

ホワイトボード

平成二十一年度 委員長挨拶

尾崎 光

第五十九期委員長になりました、尾崎光です。今年度はNHKで全国放送される番組の制作や、商学部百周年記念式典への映像コンテンツの提供など、近年見られなかった活動を予定しています。これまでの伝統を引き継ぎつつ、新たな活動にも積極的に挑戦していきたいと思えます。一年間よろしくお願ひします。

平成二十一年度 水上会長を偲ぶ OB会ゴルフコンペ開かれる!!

二月十九日、霊峰富士がくつきりと美しい姿を

見せる快晴の秦野CC

に十四名の愛好家（二期〜十八期）

が集合、恒例の水上さんをお偲ぶコンペが行われました。

ホカロン片手にナイス



ショット、珍ショットを披露、和気合々の中、皆さん真剣にプレーを楽しみました。成績は次の通りでした。

優勝 大高善靖 H1（十一期）

準優勝 塩沢邦男 H5（九期）

三位 有松幹夫 H36（十一期）

次回開催にはより多くの隠れたる名手・迷手の参加を期待してやみません。

投稿募集

マイトークの原稿を募集しています。

同期会模様、趣味、随想、想い出あるいは、現役時代の会活動や合宿の写真など、何でも結構です。下記までお寄せ下さい。

なお、お寄せ戴きました原稿につきましては、編集誌面の都合上、一部割愛させていただきますので、あらかじめご了承下さい。

原稿送付先

〒二二七-〇〇三六

横浜市青葉区奈良町二四一五-一五四

斎藤 剛（幹事長）

編集後記

陽春三月、水ぬるむ季節となりました。

椿の花が落ち梅前線も北上し追って桜もと花々の自然の営みはただただ美しく癒してくれそうです。北から南から皆様のご近況は如何でしょうか。

今回の発刊に当たり、箱根駅伝で王者中大の復活を願って、マイトークのタイトル文字を白地に赤のスクールカラーに変えて見ました。如何でしょうか。

（斎藤）